

審査の結果の要旨

氏名 西崎実穂

本論文では、表現 (depiction) を、表面 (surface) の情報を変更する知覚行為として研究する可能性を問題にしている。そのために、ジェームス・ギブソンの知覚への生態学的アプローチから、「情報」、「知覚システム (感覚器官を含む身体協調)」、「表面」の用語を導入している。

第Ⅰ部第1章では、遠近法に基づく伝統的な視覚論 (間接知覚論) との対比で、「直接知覚論」の立場が概説されている。

第Ⅱ部では、デッサンが、動的視覚行為として検討されている。2章では、デッサン研究が展望され、3章では、熟練した描画者を対象として、デッサン過程で現れた数種の描画動作の推移が分析されている。結果は、とくに頭部一体幹の前後動、即ち「画面に近づく／離れる」動きが、約2時間半に及ぶ描画の後半に増加すること、また、その変動が、全体の構図決めから、細部の描写へと至る、描画工程の転換部に見られることが示されている。画家の「姿勢」が、描画の進行を多重に支えている可能性が考察されている。

第Ⅲ部では、行為が表面につける「痕跡」を対象としている。まず、移動視が可能な場面で、表現の発生を検討する必要性が述べられている。4章では、従来の描画発達研究が「なぐり描き」に先行する時期の検討をしていないことを指摘している。5章では、誕生後18ヶ月齢までの乳児が、家庭内で、周囲を改変するために行った、自発的な反復行為が「痕跡」と定義され、縦断的に分析されている。結果は、痕跡は、「(シーツなどの表面の) 肌理の変更」、「(玩具などの) 物のレイアウトの変更」、「(食物などの) 物質状態の変更」のほぼ3種に分類できること、そして3種の痕跡の出現が、寝返りから、ハイハイ、座位、歩行へと至る、初期運動の獲得過程と関係していることを示している。知覚方法の洗練や、物に応じた動作制御が、痕跡行為と共に獲得される可能性が考察されている。

第Ⅳ部6章総合考察では、デッサンと痕跡の共通性が議論され、表面に情報を探る多種の知覚システムの活動に基づく点、さらにこの過程が行為に柔軟性や発達をもたらす点などが指摘されている。

本論文は、環境と身体の二項から表現を捉えるという独自の観点を、両者の相補性を詳細に観察することで具体化できる可能性を示しており、表現の本性や、その発生・発達の研究領域にオリジナルな貢献をしていると評価された。よって博士 (教育学) の学位論文として十分な水準に達しているものと認められる。